

---

# ぼくの声、きこえるかな？

yolu

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ぼくの声、きこえるかな？

### 【Nコード】

N3329Z

### 【作者名】

you

### 【あらすじ】

みどりといっても、たくさんのみどりがある。

太陽にあたった白いみどり、空にとけた黄色いみどり、風にふかれて、ちぎれた茶色のみどり。

そのひとつひとつの葉っぱに、ぼくの記憶があるのをきみは、しってる？

みどりといっても、たくさんのみどりがある。

太陽にあたった白いみどり、空にとけた黄色いみどり、風にふかれて、ちぎれた茶色のみどり。

そのひとつひとつの葉っぱに、ぼくの記憶があるのをきみは、しってる？

きみが生まれた日、ぼくの葉っぱはまだ小さくて、数も少なかった。

とても風の強い日で、ようやく伸びた葉も吹き飛ばされてしまうような、そんな日だった。

だからきみがうまれた証の葉っぱは、たったの一枚しか残らなかったけど、それでもきみとぼくはその日、出会ったんだ。

きみが初めて土に立った日、ぼくの葉っぱは、たくさん、ふえていた。

みどりはとても深く色づき、日差しをさえぎるために必死に僕は背を伸ばし、腕を伸ばした。

きみがいっぱい泣いた声をうけとめられるように、いっぱい、いっぱい、ぼくは伸びた。

きみが走り回れるようになった頃、初めてぼくは冬を迎える準備をはじめた。

きみを初めて覚えた葉っぱも地面に落ちなければならず、茶色の色を重ねるたびに、ぼくは忘れない。そう、口ずさんでいた。そっと葉っぱは地面に落ちてしまったけど、葉っぱの記憶は地面にとけて、ぼくのなかにまた戻ってくる。

記憶がリレーのようにつづくことをそのとき知ったんだ。

きみの笑顔がいつぱいに満ちた頃、地面は真っ白のじゅうたんて覆われていた。

とても冷たく寒いじゅうたんに思えるけど、土の中はそれほど寒くはない。

ただ葉っぱはすっかり落ちてしまったから、枝だけのぼくは、ちよつとさびしかった。

だけれどきみの笑顔は夏の日差しのように光っていた。はじめての雪にきみは声にならない声をあげていた。なんと転んでも、きみから泣き声はあがらなかった。はじめての雪がたいそう気に入ったようだった。

きみが話し始めた頃、再び葉っぱがぼくをつつみはじめた。つややかな葉っぱは朝つゆにぬれて、朝日のなかできみと同じように歌っていた。

きみも歌うのが好きだった。はじめての音楽はきみにとって、こころのメロディーになったね。

きみが、なんで？ どうして？ すべての世界が不思議だったとき、ぼくの葉っぱは大きく大きく広がった。きみの不思議がきみの世界を大きくしているのを知っていたから。

だからぼくも大きく大きく、きみをつつもうと努力した。

知れば知るほどきみの世界は広くなり、そして不思議が増えていった。

きみがはじめてお母さんにウソをついたとき、ぼくは大きな風を受け止めていた。

たくさんの雨と風が地面にふりそそぐように、きみにもたくさんの雨と風がふりそそいでいたから。

きみと同じように、大きな衝撃を耐えていたんだよ？

きみがはじめて家からはなれたとき、ぼくはいつしゅうけんめい、きみに手を振っていた。

たくさんの友達ができるように、たくさんの思い出ができるように、祈っていた。

ぼくには葉っぱの友だちも、風の友だちも、地面の友だちもいる。きみにも大切で、そしてきみの心をあたたくしてくる友だちができてほしかったから。

きみがはじめてランドセルをせおったとき、きみがすっかり地面に立って胸をはったように、ぼくもすっかり根をはり、胸をはった。きみに負けないように、しっかりと。

風も強い日だったけど、きみはとなりの桜のように、ほんのりと頬を赤らめていた。

きみがはじめて友だちとケンカをしたとき、きみのおかあさんはきみをしかっていたけど、ぼくはほこらしかった。

だってきみは、正しいとおもったことを友だちにつたえたのだから。

たしかに友だちの頭をたたいてしまったのはいけないことだけど、きみの勇気はとても輝いていたよ。

きみはじめてお父さんとケンカをしたとき、きみは家から出さ  
れてしまったね。

いくら泣いても入れてはくれなかった。

冷たい風がきみをつつんで、夜の闇もきみをつつんでいった。

きみはぼくから離れず、ずっと泣いていた。

きみはきみで反省していたよね。

お父さんの大事なトロフィーを壊してしまつて、とても反省して  
いたよね。

だけど、お父さんはそれに怒つていたんじゃない。

きみがウソをついたから怒つたんだよ。

いきなりボールが飛んできたなんて、家の中でボールが飛ぶのは  
きみが飛ばしたからだろ？

暗くあたりも見えなくなった頃、ようやくお父さんがきみを迎え  
に来てくれた。

きみはさらに泣きながら謝つたね。

ぼくといっしょに言った言葉、今でもぼくは忘れてないよ。

『うそをついてごめんなさい』

しゃくりあげながらだったけど、きみの反省はお父さんにしっか  
り届いていたよ。

きみはじめてお葬式にでたとき、きみにはまだわからないよう  
だったね。

きみの大好きだったおじいちゃんが亡くなった、その意味がわからなかったよね。

きみはおじいちゃんが骨になって、はじめて意味がわかったんだよね。

おじいちゃんがいなくなった、ってこと。

とても悲しかったね。

ぼくのそばでずっと泣いていた。一晩中泣いていた。

しまいにはお父さんに怒られてしまったけど、でも悲しくて悲しくてたまらなかった。

ぼくもどうやったらきみの悲しみをほどけるか悩んだけど、きみにかかる雨をしのぐことで精一杯だった。

一〇年も経つと、きみの【はじめて】は少なくなっていた。

きみが【はじめて】と思わないだけで、毎日が本当は【はじめて】だったんだけど、きみは当たり前だといっしか思っていた。

ぼくの葉っぱの輝きも、夏の熱い風も、秋の夕日に照らされた長い影も、すべてはじめてだったのに、きみは昨日と同じだと思っていた。

でも、それでもよかった。

きみが毎日笑って、毎日歩いて、毎日元気でいれば、ぼくはそれでよかった。

春になれば葉が芽吹き、夏になれば青く茂り、秋になれば赤く色づき、冬になればすべての葉を落とし、また春に葉を生やす。

季節はそのくりかえしで、同じことのくりかえしであることには変わりはない。

だけど

はじめてきみが家から出て行ってしまふ。

遠くに遠くに行くという。

どこまで遠くかは知らない。

きみはぼくをいつも見上げてくれたけど、その姿は今日で見えなくなる。

いつしかぼくのほうがきみより大きくなって、きみの日ざしをさえぎるようになって、ぼくはきみの邪魔をしていたのかな？

ぼくはきみのために背を伸ばして、腕を伸ばしてきたけど、

邪魔だったかな？

邪魔だったかな？

「母さん、この木って生まれたところからあるんだよね？」きみはぼくをのぞきこんで言った。

ぼくはそうだよと、風に揺れて答えてみる。

ぼくの声をきいたのか、お母さんが台所からベランダへ出てきた。

「この木？

あなたが生まれた記念に植えた木だからね」

「この木、なんて木？」きみのその質問は、かれこれ何回目だろう。

ぼくはあきれってしまう。

お母さんも同じようだ。

お母さんはぶっきらぼうに答えた。

「こぶしの木」

「こぶし?」

「そう。」

つぼみが握りこぶしのようだから、こぶしの木。

幸せをつかんではないようにって願いを込めてね」何度目かしらね。お母さんがぼやくのも無理はない。

ぼくだってそう思う。

でもぼくは知ってる。

きみは、それをお母さんに言わせたいってこと。

きみがここに生まれてきてよかったって感じたいから聞くなってこ  
と。

きみが生まれた記念の話をするときの、お母さんの笑顔が見た  
いこと。

そう、ぼくの話をするときのお母さんとお父さんの顔が、とても  
ほろんでやわらかいってこと、ぼくはしってる。

「いつも、ありがとね」

きみはぼくの幹を触れて言った。

ぼくは驚いて、木をざわざわとさせる。

だけどきみはさびしそうに笑っている。

ぼくの声きこえる?

ぼくのほうこそ、

いつもありがとう。

きみの思い出がぼくの思い出。

きみがいたから、ぼくは大きくなれた。

そして、きみに伝えたいんだ。

きみがどんなに離れても、ぼくの地面と、きみの地面は、つながっているんだよ。

ぼくの根が生える土と、きみが踏みしめる土はちがうかもしれない。

けどね、

ぼくはきみの足音を忘れてはしない。

きみの足跡を間違えたりはしない。

きみの呼吸を聞き忘れてはしないんだ。

だから、いつでも帰ってきてね。

ぼくはいつもきみのそばにいるよ。

そして、きみのそばに、たいせつな人たちがいるんだから。

ぼくの声、きこえるかな？

「いつてくるね」

いつてらっしやい。

ぼくは精一杯、さわさわと枝を揺らした。

風と太陽と土に手伝ってもらって、ようやく揺らした。

いつでも、ぼくは君のそばにいるんだからね。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3329z/>

---

ぼくの声、きこえるかな？

2011年12月11日14時48分発行